

気だるげ男子の いたわりご飯

水嶋しま Shima Mizushima



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

1 たけのこと鶏肉の煮物

「はあ、疲れた……」

仕事で疲弊した体を引きずるようにして、私、清家杏は古い駅舎の階段を一段ずつ上った。

疲労が蓄積した体はひどく重い。手すりを握る手にも力が入る。

「あと、もう少しで家に着く……」

線路をまたぐようにしてかけられた通路をふらふらと歩いた。

通路の端まで行くと、今度は階段を一段ずつ下りていく。駅の構造上、仕方がないとはいこの上り下りは仕事終わりの体にこたえる。

若干、足元がおぼつかないのはエネルギー不足のせいだ。

昼食を食べる暇がなかった。一日のスケジュールを確認して、スタッフに仕事を割

り振つて、会議をハシゴして。その合間に事務仕事を片付けた。

気つけば、昼休みの時間はとっくに終わっていた。スタッフからお土産でもらったクッキーをミネラルウォーターで流し込みながら、「せめてコーヒーが飲みたいなあ……」と、今から数時間前、夕方頃の私は思っていたのだ。

駄の改札を出ると、生ぬるい風を感じた。
肌が少し汗ばんで、髪が張り付いている。

伸びてうつとうしい。最近は美容院にも足が遠のいている。休日はつい、部屋でごろごろしてしまうのだ。

ため息をつき、後ろの髪と前髪をいっしょにして頭の上で束ねた。手首につけていたゴムを使って、ぐるっと巻き、簡易なお団子ヘアを完成させる。

そろそろ季節は夏の盛りになろうとしている。夏は唯一の閑散期だ。それなのに、こんなに忙しいなんて。

数ヶ月先の繁忙期のことを思うと、ドッと疲れが増した。私が勤務しているのは、主に犬と猫のおやつをメインに製造しているペットフードメーカーだ。素材だけを使つた「無添加の安心安全のおやつ」がウリである。

昨今のペットブームの影響もあるのか、小さな会社だけど、毎年順調に業績を伸ばしている。

こぢんまりとした会社ゆえ、何事にも対応できる社員が重宝される。

私はもともと事務職だったのだけど、商品の発送作業を手伝つたり、製造業務のヘルプにまわつたり。要は都合の良い人材として扱われている。

そんな二十九歳の現在、自分の名刺には役職が付いている。器用貧乏という、哀しい性のおかげだと思う。

お腹が鳴つた。

ぎりぎりとはいえて二十代女子にしては、威勢の良過ぎる音だ。
私は正直して、いつも仕事の内情やアレコレをうつし、頑の口から

私は仕事でいる。仕事の結果やアレコレをもしゃもしゃ頭の中から追いでいた。そん

今日は、待ちに待った金曜日。

「おいしいごはんが、私の帰りを待つてる……」

一人暮らしをしているマンションには、今頃おいしいごはんが用意されているはずなのだ。

大好きな煮物と、ほっこり沁みるお味噌汁と、あとは副菜が一品ほど。すぐに食べられるように、お皿に盛つてテーブルに準備してくれている。食べたあとは後片付けをする必要もない。ささっとシャワーを浴びて、満腹のお腹をさすりながらぬくぬくのベッドで眠りにつく……

想像するだけで最高に幸せな気持ちになり、心なしか足取りが軽くなる。いつも私においしいごはんを作ってくれるのは、西依さん^{にじょう}という五十代半ばの女性だ。

彼女は「お料理代行サービス・きつちんすたっぷ」のスタッフさんだ。

手際がよくていつも笑顔で、顔を合わせると「お疲れさま」とか「たくさん食べて栄養をとってね」とか、劳わりの声をかけてくれる。

笑顔が標準装備すぎて、彼女の胸元にある名札の「ニシヨリ」という文字さえ、につっこりと笑っているような気がしてくるほどだ。

初めてこのサービスを利用したときから指名を続けている。

彼女は私にとつて最高のスタッフさんだった。

西依さんに来てもらうのは週に一度。それが今日なのだ。

料理代行のサービスを利用するようになつたのは、今から半年ほど前——繁忙期でへとへとになつていた頃だ。

その頃は忙しさを理由に自炊をサボり、コンビニ通いを続けていた。もともと料理が苦手だというのもある。

しかしコンビニとは不思議なもので、慣れてくると何を食べても味に飽きが来るようになつた。

おにぎり、お弁当、パスタ、サラダ……

種類は違うし、味だって甘辛かつたり、酸っぱかつたり、しょっぱかつたりするのだけど、なぜか頻繁に食べていると「味に飽きたな」と感じる。

外食に行つても似たような現象が起きる。

そして総じて味が濃い。私は基本的にあつさり味が好きだ。特にアレルギーはないし、食いしん坊なのでなんでもおいしくいただくけれど、好みでいうとあつさり派だ。堪えきれなくなつた私は、「あつさりご飯 宅配」なんてワードで検索をかけ——

そして、「きつちんすたっふ」……西依さんに出会ったのだ。

西依さんは、長年、主婦として家族のために食事を提供してきたスキルをいかし、きつちんすたっふで働きはじめたという。

『いつも私みたいなおばちゃんを指名してくれてありがとうね。でも、遠慮せずに他のスタッフを指名していいのよ。洋食とか、イタリアンとか、あとはタイ料理とか、いろいろ得意なスタッフがいるからね』

いつだつたか、そんな風に言っていた。西依さんは謙虚で素晴らしいひとだ。けど、洋食もイタリアンも、タイ料理だって、今は簡単に外食でお目にかかる。

ほっこりする家庭料理のほうが難しいのだ。貴重で大切な私のスタッフさん。

利用するうちに、きつちんすたっふがしっかりとした会社だということも分かつた。

予約時や利用前後のフォローも完璧だし、スタッフへの指導も怠らない。

それならばと、数ヶ月前から家の鍵を預けるために「預かり証」なるものを発行してもらつた。

社内管理システムで、誰が鍵を持ち出しているのか、いま鍵がどこにあるか、常に監視しているのだとか。

おかげで、私は帰宅後すぐにごはんにありつける。

マンションに辿り着き、エントランスを足早に駆ける。死にそうなくらい体がかつたのが嘘みたいだ。はやく、はやく、と思いながらエレベーターの到着を待ち、うきうきしながら自分の階に着くのを待つ。

ダッシュで部屋の前行つて鍵を差し込む。

そして、勢いよくドアを開けた。

「西依さん、ただいま～～！ いつもありがとうございます！ ごはんできても、す……か……」

いつも笑顔で迎えてくれるはずの彼女は、そこにいなかつた。
代わりに、やたら見目麗しい青年が立っている。

私は勢いよくドアを閉め、部屋番号を確認する。

真正正銘、自分の部屋だった。そもそも間違つていたら鍵が開くはずない。

今度は、そおっとドアを開ける。

「え……？ だ、だれ……？」

自分の部屋に見知らぬ若者がいる事実に、心臓がバクバクする。

もしかして、逃げたほうが良いのだろうか？　まさか、いま問題になつてゐる闇バイトとか？

ごくり、と息を飲む。

部屋の中にいる青年は、無表情でたたずんでいる。

「……す」

え……？　なに、酔？

小さくて聞こえなかつた。彼は、吐息のような「す」という一言を発し、首から下げた名札を私に見せてくる。

そこには、投げやりな文字で「ぐんじ」と書かれていた。

濃いオレンジで、形はシンプルなエプロン。

胸元には白抜き文字で「お料理代行サービス・きつちんすたっふ」とある。

西依さん(せいさん)が、いつも身に纏つっていたエプロンだ。

「……郡司祥生(くんじしようう)です」

ああ、なるほど。さつきの「す」は「酔」じゃなくて、「郡司で『す』」の「す」

かあ。まつたく、最近の若い子は声が小さいから困る。

そんなことを思いながら、部屋に一步進み入る。

「きつちんすたっふの方だつたんですね。もしかして研修中とかですか？」西依さんに教えてもらつなら間違いないですよ。すつごくおいしいし、手際も良いし

スタッフだと分かつて、とりあえず安心する。

もしかしたら、この青年は西依さんの仕事ぶりを学ぶためについて来たのかもしれない。なにしろ彼女は、料理の腕前はもちろん気遣いだつて一流なのだ。

とはいへ、肝心の西依さんの姿が見えないのが気になる……。

「あ、えつと。郡司……さん？　いつも指名させていただいている西依さんは……？」

再度、美青年に訊く。

彼は私から視線を逸らし、スマホを取り出した。片手で素早く操作して画面をこちらに向けてくる。

「ん？　なにに『指名いただいたスタッフが急用のため、代わりのスタッフを手配いたします』……？」

画面の文字を読んでいく。

どうやら西依さんは家庭の事情で急遽お休みを取つたらしい。謝罪と共に、代わりのスタッフでよければ派遣できる旨が説明されている。

「あなたが了承したから、俺はここに来たんですけど?」

美青年が冷ややかな表情でこちらを見ている。

私は慌てて通勤バッグの中に手を入れた。大容量のバッグの中からスマホを探し当て、きつちんすたつふのアプリを確認する。

同じ文面の通知が、昼前に私のスマホにも届いていた。

「あつ……そいいえば、通知が来てて、いつもみたいに西依さんからの献立のお知らせだと思って、よく確認せずにOKボタンを押しちゃったような……」

当日になると、アプリで献立を確認できるのだ。

通知が届いたのは、ちょうど会議をハシゴしている最中だった気がする。忙し過ぎてきちんと読んでいなかつた。

美形スタッフの視線が、グサグサと刺さる。

「あ、あの。ちゃんとアプリの詳細を確認してなくて……、ごめんなさい」

とりあえず、素直に謝つておく。

それから恐る恐る顔を上げた。

「それで、西依さんは大丈夫なんですか? なにか困ったことに……」

「個人情報なんで」

私の声を遮るように、無表情のまま美形スタッフ——もとい郡司が冷たく言い放つ。その言い方にカチンときた。このご時世、個人情報は大切だし、詳しい事情をいえないことも分かる。私はただの客なのだし。けど、もうちょっと言い方はないのだろうか。

失礼な態度に反抗するように、私はじろじろと彼を見た。

おそらく二十歳そこそこだろう。

顔が小さすぎるのによく分からなかつたけど、改めて見るとかなり長身だ。細身で足が長い。着ているのは普通の白いTシャツと黒のパンツなのに、スタイルが鬼のようにいいのでモデルのように似合っている。

ダルそうにしているくせに、ちょっとした所作が美しくて育ちが良さそうに見える。ツンツンした王子様のようだ。

明るい色に染められた髪は、無造作に束ねられている。ほどけば肩あたりまである

のだろう。無造作な感じさえ計算されたスタイリングのように思える。おまけに髪はツヤツヤだし、若さゆえ肌はつるつるしている。

いや、私だってね？　ちょっと忙しくて手を抜いてるだけで、ちゃんと時間をかけてあげたら髪だってうるつやだし、肌だって……

「はあ……」

ちょっと悲しい気持ちになつてきた。

なんとなく力が抜けて、ダイニングテーブルの席につく。

深く息を吸つて、気が付いた。ふわんと鼻を突く出汁の香り。

「ん？　え、これつて……」

目を見開いてテーブルの上を見直す。

テーブルの上には、ご馳走が並んでいた。

西依さんがいつもそうしてくれるように「今日の献立」と書かれた名刺サイズほどのメモが、ごはんのお皿の横、小さなスタンドに立てかけられている。

【今日の献立】

- ・たけのこと鶏肉の煮物
- ・かつお節とじゅこの和風ボテトサラダ
- ・小松菜と人参のゆず胡椒和え
- ・ごはん
- ・具だくさん豚汁

「ちょっと——！　献立が神なんだけど！　好きなものばかり。全部が私の好み。
「お、おいしそう……」

思わず声が漏れた。

「ま、まさか、これ作ったのって……」

おそるおそる、彼に向かって人差し指をさす。
「他に誰がいるの？」

あつさりと肯定された。

信じられない。こんな若い子が？ ぴつかぴかのイケメンが？ 和食のど真ん中みたないなメニューを作ったの？ 「嫌なら食べなくてもいいけど」

「食べます！ 食べるに決まってるじゃない……！」

この瞬間にために、へとへとになつても仕事をがんばつたのだ。待ちに待つた、私の一週間のご褒美……！

ほかほかのごはんが盛られたお茶碗を彼から受け取り、私は「いただきますっ！」と手を合わせた。どちら食べようか迷う。

しばらく逡巡してから、まずはメインであるだけのこと鶏肉の煮物に箸をつけた。

たけのこの食感が好きだ。噛み応えがあるのにかたすぎない。しゃきしゃきして、あつさりとした味わい。鶏も肉のジューシーな旨味がたけのこにギュッとしみこんで、ほっこりした煮物に仕上がっている。

「ん〜、うまっ！」

鶏もも肉は大きめにカットされていて、満足感がある。彩りも兼ねてか、さやいん

げんが添えられているのだけど、ほのかな苦みがしようゆと出汁に絡んでおいしい。自然とごはんにも箸が伸びていた。つやつやで甘みを感じる白米を勢いよくかきこむ。

おいしいおかずとほかほかの白米を交互に頬張つていると、体の中に蓄積していた疲れとか悩みが消えていく気がする。

「しあわせ〜〜！」

単純だけど、お腹がいっぱいになると、それだけで幸せを感じるのだ。

副菜のゆず胡椒和えは小松菜と人参がくつたりしていて、味がよくしみこんでいる。小松菜にはわずかにシャキシャキ感が残っていてうれしい。びりりと辛いゆず胡椒に食欲をそそられ、副菜にもかかわらずごはんがもりもりと進む。

あつという間にお茶碗が空になってしまった。

「おかげ〜！」

お茶碗を郡司に差し出すと、冷ややかな視線を投げられた。

「……そういうサービス、やつてないんで」

「西依さんにおかわりって言うと、すつぐくろしそうな顔になつて、いっぱいごはん

んを盛つてくれてたんだけどね～～！」

ぜつたいに聞こえているはずなのに、郡司は素知らぬ顔で洗い物をしている。私は

仕方なく席を立つて、炊飯器を開けた。

「わわ！　まだいつぱいごはんがある！」

どうやら二合ほど炊いてくれたらしい。

これで心置きなくおわりができる。

ほくほくとした気持ちで白米をお茶碗についだ。

「きつちんすたつぶさんつて、すごくしつかりしてますよね」

私の好みが、代理スタッフである郡司にもしつかり伝わっていることに感動して、ついそんなことを言ってしまう。食いしん坊なので白米は念のため二合炊いておくと喜ぶ、という情報がきちんと伝達されているのだ。

「……どうも」

席に戻ると、一瞬だけ郡司と目が合った。

彼の愛想のなさはどうかと思う。けれど、悔しいけれど味はめちゃくちや満足だ。

席に戻ると、私はまだ手を付けていなかつたサラダに箸を伸ばした。

和風ボテトサラダだ。

ボテトサラダの材料はとてもシンプルで、じやがいもと玉ねぎ、それからかつお節とじやこ。

じやがいもはしつかりとつぶされてペースト状に近い。

新鮮でしゃつきりした水菜の上に、まるく形を整えられた和風ボテトサラダがこんなりと盛られていた。なめらかな舌触りと、さっぱりした玉ねぎの風味。

かつお節とじやこのおかげで、立派な和食の副菜として成り立っている。

「こういうレシピってスタッフさんが考えてるんですか？」

ボテトサラダを豪快にもぐもぐしながら、イケメンスタッフに問う。

「……まあ」

「へえ～～！　すごいですね。これ、すっごくおいしいですよ！　全部おいしいけど、

この和風ボテトサラダは初めて食べました。よく思いつきますね！」

表情筋はガチガチに固まつてそうだけど、頭はやわらかいのかもしれない。若さゆえの柔軟さというか。

「……つす」

今度の「す」は、「ありがとう」さいま『す』の「す」だろうな、と豚汁をすすりながら思った。

「んつ、この豚汁もおいしい——！」

献立のメモに「具だくさん」と書いてあつたけど、本当に盛りだくさんの豚汁だ。薄切りの豚バラ肉、大根、人参、油揚げ、こんにゃく、ごぼう、ねぎ、しいたけ……

贅沢すぎる。もうこれだけでおかずになりそうな勢いだ。それぞれの具材から旨味がしみだしている。それなのに雑多な味になつてない。出汁と味噌がじょうずに具材たちをくるんで、一杯の汁ものとして成立している。

「具材がたくさんなのもうれしいけど、汁そのものがおいしい！ ぐぐぐ、永遠に飲める！ ラーメン鉢でもらいたいくらいだな〜〜」

再び立ち上がりつて台所に向かう。

それから雪平鍋に入つた豚汁のおかわりをしていると、隣に立つ郡司の視線に気づいた。

「なに？ ちゃんと自分でおかわりしますよ。あ、それとも気が変わった？ 西依

さんみたいについてくれる感じ？」

「いや、そういうのはやらない。……すげえ食うなつて思つて」

洗い物を終えたらしい郡司は、タオルで手を拭きながらこちらを凝視している。相変わらず無表情だけど、よく見るとほんのわずかだけ感情をうかがい知ることができた。

どうやら驚いているらしい。

きっと私の食べっぷりに敗北感を感じているのだろう。ふふん。

私は火を止めてから、彼に向き直つた。

「いつもこれくらい食べるのよ。こはんは少なくとも二回はおかわりするし、そうすると汁物も同じくらい必要になるし」

「……ふうん」

郡司が、私のほうをちらりと見る。

彼の言いたいことは分かる。私の体型と食べっぷりがちぐはぐなのだろう。

私は女性にしては身長が高く、体重は平均値をかなり下回っている。つまりかなり痩せている。

黙つていれば優^{はかな}げな外見と言われることもあるけど、実際のところはずばらで大食いな女子なのだ。

そして、いまさら気づいたのだけど私の部屋は散らかっている。

今日の朝、勢いよく脱いで放り投げたパジャマが視界の端に映つた。リビングのソファに、でろん、とだらしなく引っ掛けている。色気のないキャラクター柄のパジャマの存在が気になつて仕方がない。

西依さんにはとつぶくにずぼらな面がバレていたので、氣を抜いていた。

まさか男子が部屋に来るなんて事態になるとは思つていなかつたのだ。意識すると、急に恥ずかしくなつてくる。とにかくパジャマを片付けたくて仕方がない。

いてもたつてもいられない感じだつたけど、隣の郡司が落ち着き払つているので、

影響されて徐々に私も冷静になつてきた。

記念すべき部屋に訪れた男子第一号は、世にも美しい青年だつた。

お料理代行サービスのスタッフだけど……

そこでふと言葉がこぼれた。

「見た目と違つていうなら、郡司くんもでしよう。和食というよりは、イタリアン

とか得意そつだし」

「よく言われる」

否定しないんかい。

隣に立つと郡司が長身であることを再確認してしまう。

私も背が高いので、がつたり見下ろされることに慣れていない。

変に落ち着かない気持ちになりながら、私は少しだけ遠慮がちに豚汁のおかわりをしたのだった。

おいしいものでお腹が満たされると、体中が喜ぶ。

体の隅々まで、じんわりと栄養がしみわたつていくような感じがする。この感覚がとても好きだ。

郡司が帰つたあと、私は幸せな気分でベッドに入った。瞼を閉じたのと同時にぐぐつくり寝ていたはずだつただけれど、気づいたら私は真っ暗闇の中で立ち尽くしていた。何も聞こえない。無音だ。

しばらくすると、目の前に小さな明かりが見えた。ほんやりとした光だった。少しずつ鮮明になっていくそれは、小さな子どもの後ろ姿だった。

あ、これは夢だな、と思った。

ときどきみる夢なのだ。

不思議な体質だと自分でも思うのだけど、私は疲れると同じ夢を見る。

だから、繁忙期や残業が続くと、そろそろだなと思う。

夢の中で、私は身動きがとれない。金縛りにあつたみたいに、指一本動かすことはできない。

小さな子どもが、背伸びをしている。

キッチンに立っているのだ。つま先立ちでフライ返しを手にしていた。たどたどしい手つきで料理をしている。いつしじょうけんめいに背伸びをする姿を見ていると、なぜかいつも胸が苦しくなる。

手を貸してあげたい。

何か、言つてあげたい。

でも、動けない。言葉を発することができない。

私は苦しい気持ちを抱えたまま、幼い子の後ろ姿を見ていた。



月曜日は憂鬱になるひとが多いようだけど、私は意外と平気だ。
むしろ、めちゃくちややる気がある。

土日にしっかりと休んで心身が元気なので「仕事よドンと来い！」とすがすがしい気持ちで月曜日を迎えている。

取引先には土日に営業しているところもあり、出社すると問い合わせのメールや発注などがわんさか来ている。

そういうメールは、多ければ多いほど良い。

さつそく、急を要するメールから順に返信をしていく。

キーボードを打ちながら、私は思わずんまりした。このカタカタという音がたまらなく心地良い。タイピングをしたときに出来る音……いわゆる打鍵音が大好きなのだ。お気に入りの音を見つけるために、いくつものキーボードを試し打ちした。家電量

販店に足を運び、理想のキーボードを探し求めた。

その結果、たどり着いたのが現在の相棒だ。私は自腹でキーボードを購入している。外国製のワイヤレスタイプ。薄ピンク色をしているので、見た目からしてかわいい。キーボードに指を下ろすと、妙に馴染む感じがして愛おしい。

私の場合は「カタカタ」というより、「カピカピ」のほうが正しいと思う。なんともいえない癒しの音だ。頭の中を音源でマッサージされている感じが、最高に気分を良くしてくれる。

私が残業を厭わないのも、この打鍵音のおかげだ。仕事をすればするほど癒されいく。永遠に聞いていたいと思ふくらい好きな音なので、自分の天職は事務職だと思つていてる。

しかし、打鍵音というものは周囲のひとを不快にすることがあるそうだ。

私に言わせると、使用する側の人間とキーボードが合っていない。キーボードにも様々な種類がある。自分に合ったものを使うのがベストだ。

もしくは、キーボードを意味もなく乱暴に叩いているとか。

決して、荒々しく叩いてはいけない。そつと軽やかに打鍵すると良い。

そうすれば、心地よいカピカピ音が響く。

耳が癒される。まるで、清流のせせらぎのようだ。うつとりしながら仕事をしているので、ときどき「危ないヤツ」と言われることもあるけれど知ったことではない。素晴らしい音に癒されながら、あつという間にメール返信を終える。もう終わってしまった……と絶望感を覚える。

残念だけれど仕方がない。統いて、発注分の在庫を確認する。
在庫がなければ、製造してもらおうよう製造部に依頼する。

納期内に商品を発送できてるか、急遽休んだスタッフの補填は大丈夫なのか。事務作業も溜めないようにしなくては。

そんなことを考えながら、勢よく仕事をこなしていると、たいてい声がかかる。今日もそうだった。

「清家主任、すみませんっ！　お電話なんんですけど、おねがいします。たぶん、ヨーキー？」って、おっしゃってるんですけど。ちょっと訛りがあつて聞き取れないんです」

女性事務スタッフの竹井嶺衣奈^{たけいれいな}が困った顔でこちらを見ている。

ヨーキーというのは、小型犬のヨークシャー・テリアのことだ。ブリーダーからの問い合わせだろうか、と思いながら電話に出ると、聞き慣れた声が耳に届いた。

「あ、清家さんかい？ 元気にしとるかねえ」

独特の INTRO-SHION と、しゃがれた声。

長年お世話になつてゐる獣師の男性だった。電話の内容は簡単な近況報告だけで、特にむずかしいことではなかつた。

通話を終え、受話器を置いてから竹井さんに「ヨーキーじゃなくて、リヨーキだったよ」と伝える。

「りょーき……？」

メモとペンを片手にした彼女は、目をぱちくりさせている。

私の言葉に戸惑つているようだ。

私は頷いて、言葉を返す。

「そう、獵期。^{りやくき} うち、鹿肉のジャーキーを製造してゐるでしよう。さつきの電話は獵師さんからで、獵期以外はなかなか鹿肉が手に入らないから卸したくても卸せないよ。どうしようもないねっていう、まあ世間話みたいなもの」

一年中、狩猟ができるわけではない。狩猟ができる期間は獵期と呼ばれる、秋から冬にかけての三ヶ月間だけなのだ。

「うちの会社も一気に仕入れをして冷凍保存してゐるんだけどね。それでも毎年、夏場になると在庫が少なくなるから。早く獵期にならないかなつてお話。そういうえば先々週あたりにも電話で話したつけ……」

世間話好きな獣師の顔を思い出して、私は苦笑いした。

「なるほど！ 勉強になります！」

そう言つて大きく頷きながら、竹井さんはメモにペンを走らせ、ふと手を止めた。

「……獵期が冬なのは、なにか理由があるんですか？」

その質問に頷く。

「もちろん。誤射の危険性が低いからね」

冬は木から葉が落ち、草が枯れる。山野の見通しが良くなるのだ。また、農閑期のため里山で作業をする人の数が減るという事情もある。

「あとは、鳥獣の保護のためもあるの」

鳥獣の大部分は、春夏が繁殖期なのだ。

「そ、うなんですね……！」

せつせとメモをとる竹井さんを、微笑ましい気持ちで眺める。

彼女は三ヶ月前、新卒で入社してきた社員だ。今のところ事務仕事を担当してもらっている。彼女の研修は私が受け持つことになった。素直でがんばり屋だし、順調に仕事を覚えて戦力になりつつある。

電話での受け答えが苦手なようで、初めは受話器を取る手が震えていた。

そういう場面を見てしまうと、つい「電話なんてぜんぶ私が取るから大丈夫！」とお節介気質を發揮しそうになるのだけど、ぐつところえた。

これは仕事なのだ。そんなことをしても彼女のためにはならない。指導係として心を鬼にした。

「私がそばにいるときは、竹井さんが電話に出てください。無理だと思ったら、すぐにかわるから」

そう言つて励ますうち、少しずつ苦手意識がうすれていつたらしい。受話器を取る手に怯えがなくなつた。さつきだって元気よくはきはきと電話に出ていたし、不安があればすぐに頼つてくれる。

なんの問題もない。彼女は、問題ない……

私は資料をめくる手を止めた。そして、じりじりと竹井さんとは逆の方向、右側を向く。

座っているのは、すがねのじゆくふみや杉崎史哉すぎさき じゅさいという男性社員だ。竹井さんと同じく新卒で入社してき了。先月――六月から、私が彼に仕事を教えている。

なぜそんな中途半端な時期からなのかというと、杉崎くんにとつて私が三人目の指導係だからだ。

彼は最初に企画部に配属されたのだけど、そこでトラブルを起こして製造部に異動になつた。

先輩社員の指導をことごとく無視したらしい。自分勝手に仕事を進めた結果、ミスが発生。

何度も同じようなことが続き、フォローにまわっていた先輩社員が匙スプーンを投げた、ということだそうだ。

そして異動先の製造部でも似たようなことがあり、私に役目がまわってきた。パソコンに向かう杉崎くんをそろりと眺める。

イマドキの子という感じだ。

すらっとして色白で、すつきりとした顔立ちの男子。ただ、私は彼が表情を崩したところをまだ見たことがない。スーツを着慣れていない雰囲気だけは初々しい新人という感じがして、見ていて微笑ましい。

ただ、と私はため息を吐いた。

そんな彼の問題点は、大きく分けて三つある。

一つは、指導係の指示に返事をしないこと。指示内容を理解しているのか、こちらとしても判断ができない。

二つめは、他の社員との関わりを極端に避けていること。挨拶すらしないのだ。周囲と協力しながら進めていく業務もあるので、最低限のコミュニケーションは必要だと思う。

三つめは、他の部署でも問題になっていた点。指導を無視して勝手に仕事をしてしまうことだ。

ミスが起きないように先回りするにも限界がある。

匙さじを投げた先輩社員の気持ちが、今さらながら分かる。

何か、良い指導方法はないものか……。ぎゅぎゅっと眉根を寄せながら、私は再び手元の資料に視線をやる。
それからおもむろに立ち上がった。

2 ジュウツと五目巾着煮

職場の喫煙スペースで、先輩社員の宮野実久がふうっと煙を吐いた。

「問題は三つあるって、杏は言うけどさ。結局はひとつなのよね……。私も、杉崎と離れて冷静になって、やつと分かったことなんだけど」

彼女は、私よりも四歳年上の先輩だ。私は煙草を吸わないのだけど、ヘビースモーカーである彼女を捕まえるには、この喫煙スペースで待ち構えているのが一番手っ取り早い。

いくつか確認事項がクリアになったあと、自然と杉崎くんの話題になつた。
彼女は製造部の社員で、杉崎くんの二番目の指導係だつたのだ。

「……問題はひとつ、ですか？」

「そう、結局はコミュニケーションなのよ。あの子、それが不得手なんでしょうね」
実久さんが慣れた手つきで、紙煙草の灰を灰皿に落とす。

私はそれを眺めつつ、三つあると思っていた問題点を思い浮かべた。

たしかに、実久さんの指摘する通りだ。

返事をしなかつたり、挨拶をしなかつたり、指導を無視したり……

どれもコミュニケーションが問題になっている。

思わずむむつと唸ると、実久さんは今度は煙草を吸わずにため息を吐いた。

「杏に押し付ける形になつて、本当に悪いと思つてる。でも、うんともすんとも言わないんじやあ、製造のほうじや無理よ。そつちでも難しいとは思うけど……」

「今のところ、なんとかやっています」

「ほんと、助かるわ。ありがとうね」

「彼は、なんというか自分と周囲との間に、壁を作つているような気がするんですよ

ね……」

かなり強固な壁だと思う。

そう言うと、実久さんはカチカチッとライターを操作して、二本目の煙草に火をつけた。

「壁ねえ……。いわゆる陰キャってやつじゃないの？ 勉強が得意なんだし、きつとソレよ」

勉強が得意なのと陰キャはイコールではないと思うのだけど、彼女の主張も分からなくはない。

杉崎くんが入社してきたとき、ちょっととした話題になつた。こぢんまりとしたわが社ではめずらしい高学歴なのだ。

大学名を聞くと、エリート、華やか、裕福そう、スマート……。なんとなく、そういうイメージが湧く。外見も悪くないタイプだったので、女子社員は色めき立つてたのも事実だ。

仕事の進め方と性格に難がありそ……、という話になつてからは、すっかり人気は下火になつてしまつたのだけど。

「問題が三つから一つになつたので、実久さんに相談してよかつたです」

やはり、自分で考えるのはよくない。周囲とコミュニケーションを取るのは大

事だ。相談したり、誰かに話すことで解決策が浮かんだりする。

私が微笑むと、ふうっと煙を吐きながら、実久さんが肩をすくめる。

「相変わらず、杏は前向きだね」

「何事も、考え方次第ですから」

これはいわゆる、座右の銘というやつ。ことあるごとに「考え方次第だな！」と思

うようにしている。

「彼には、こまめに声掛けするようになります。話すことが苦手かもしないけど、まつたく会話なしで業務を進める事は不可能だと思いますので。それも込みで仕事なんだよっていうことを、少しずつでも伝えていこうと思います」

「途中で投げ出した私がいうのは違うかもしれないけど、よろしく頼むわ」

片手でゴメン、という仕草をしながら、実久さんが頭を下げる。

私は微笑んで首を横に振った。

実久さんは、仕事を教えてもらった恩がある。それに新入社員を指導するのも、一応とはいえる書きのある自分の職務だと思うので、だつたら良い方向に進むようにがんばるだけだ。

それからは、実久さんに宣言した通り意識して杉崎くんに声を掛けるようにした。まずは朝の挨拶から。今まででは事務所の全員に向かって「おはようございます」と挨拶をしていたのだけど、個別に声を掛けるようにした。

まずは、左隣のデスクにいる竹井さんに。

「竹井さん、おはよう」

「おはようございます、主任！」

竹井さんがペコリと頭を下げながら笑顔を見せる。

続いて、右側にいる杉崎くんに向かって。

「おはよう、杉崎くん」

「…………」

パソコンの画面に向かつたままで、彼からは反応がない。

一瞬、胸がどきりとする。

この至近距離で無視をするのは、なかなかメンタルが強い。普通の人間は、名前を呼ばれると嫌でも反応してしまうものだ。

「杉崎くん？」

私はもう一度、彼に声を掛けた。今度も聞こえないふりをするのだろうか。どういう反応をするのか、少しうきうきしながら様子をうかがっていると、杉崎くんがマウスを操作する手を止めた。

「…………、ざいます」

少しだけ、会釈するような仕草をみせる。

「うん、おはよう」

私は満足して、にこにこしながら着席した。

その瞬間、張りつめていた空気が和らいだ気がした。

私と杉崎くんのやり取りを、他の社員がひそかに注視していたのは分かつてた。

そりやあ、問題があると噂される社員の動向は気になるものだ。

竹井さんも安心したように、ほっと小さく息を吐いている。

お昼も、夕方も――挨拶以外でも、こまめに杉崎くんに声を掛け続けた。ただ、もちろんやりすぎてはいけないことも分かっている。

彼が忙しそうな時には声を掛けない。なんとなく余裕がありそうだな、と思う時に声を掛けるようにした。

「進んでる?」

「……はい」

「分からぬところ、ある?」

「……今のところ、ないです」

「できたら送信する前に見せてね」

「……はい」

すると、ぼそぼそとだが、返事をしてくれるようになった。

たまたま事務所にいた実久さんは、あとで「私には何を言ってるか、ぜんつぜん聞き取れなかつたんだけど?」と、やたら耳の良いひと扱いされた。

――実は、私が指導を受け持つてすぐの頃に杉崎くんはミスを犯している。勝手に仕事を進めた結果と、彼にとつてはお馴染みのミスだった。誤った商品価格を取引先にメールしてしまったのだ。

改定前の価格がデータ上に残つており、それを見て見積書を作成したらしい。

すぐに気づいたので、大事にはならなかつたのだけど。

そのことを彼に指摘したとき、すぐ悔しそうな顔をした。自分が間違つたことが

信じられない、というような表情だった。

その顔を見たときに分かった。

彼は、ものすごくプライドが高い。

自分の間違いを許せないのだ。指導係にきちんと確認をすれば済む話なのだけど、

それもプライドが邪魔をするのだろう。

もしかしたら杉崎くんにとって、ここは理想の職場ではなかつたのかもしれない。

こぢんまりとした会社だし、彼の学歴ならもつと有名な企業に就職していてもおかしくない。この会社をちょっと下に見ているから、そこで働いている人間には頼る気がおきないのかも。

なんとなく、そんな風に思った。

とはいって、彼は新人社員なのだし、ある程度成長するまではこちらを頼つてほしい。

ふいに、一人目に彼を指導していた社員の言葉を思い出した。

『アイツ、問題はありまくりだけさ。基本は有能なんだよ。一度説明したらすぐに理解するし、処理は早いし』

実際に杉崎くんの指導係になつて、その言葉通りだと思った。

彼はとても能力のあるひとだ。ちょっと難ありな部分があるのは確かだけど、方向性を変えるだけで事足りる。難儀な新人社員を任せられて「可哀想……」と、私は周囲から同情されているけど、そんなことはない。

考え方次第なのだ。

指導がうまく行けば、彼はめちゃくちや仕事ができる部下になる。「可哀想」どころか、むしろ私はめちゃくちやツイてる！ 将来有望な金の卵をゲットしたも同然なのだ！

ぜつたいに彼を有能で頼りになる部下に変身させる。私は密かに「部下有能化計画」というのを推し進めている。いずれは、私が抱えている大量の仕事を彼らに任せられる算段なのだ。びしばし鍛えて、どしどし仕事を振る。

そうすれば、自分の仕事量が減る。連日残業の日々から脱却できるのだ！

＊

私の「部下有能化計画」を聞いた郡司が、テーブルの上に小鉢を置きながら、ぼそりとつぶやく。

「なんか、腹黒だな……」

今日も郡司は、嫌みつたらしいほどにぴかぴかで、きらきらしている。ゆるっとしたTシャツとシンプルなパンツスタイルなのに、どこの王子様だろう、と錯覚するほど様になっているのだ。

「腹黒とか心外なんだけど。せめて策士とかにしてくれない?」
残念ながら、今日も癒しスマイルの西依さんはお休みで、代わりにこの無愛想王子がうちにやつてきた。

私はテーブルについて、郡司が整えてくれるごはんを眺めながら言つた。

「評価が低いのは本人も不本意だろうし、会社のためにもデキる社員になつたほうがいいのは当然だしね。指導するといつても、やさしく! を心掛けてるよ、ちゃんと」

どうだか、と首をかしげながら、郡司がほかほかごはんのお茶碗を渡してくる。

「でもさ——! やつぱ疲れるよね。本当は、あんまりひとに教えたりするの得意汁ものをテーブルに置く郡司に、視線で「もう食べていい?」と急かす。ちなみに、今回の献立は以下のとおり。

じゃないし】

おそらく私は、ひとりで猪突猛進に、ドドドドッと仕事を進めていくほうが性にあつていて。脇目も振らずといふか。むしろ振りたくないというか。

【今日の献立

- ・じゅわっと五目巾着煮
- ・ほうれん草のピーナッツソース和え
- ・なすの甘酢だれ
- ・ごはん
- ・トマトのふわふわ卵の味噌汁

「はい、召し上がる」

許可が出たので、私は、ぱんつと手を合わせてお箸を取る。

「いただきま～す！」

まずは、なすの副菜をいただく。

照りつ照りの見た目だ。甘酢だが、なすにとろつとよく絡んでおいしい。ちょっと濃いめの味付けなので、ごはんがもりもり進む。

野菜とは思えないほどジューシーだし、なすの形がほとんど崩れていない。もしかしたら、たれと絡める前に一度、油で揚げているのかもしれない。

「素揚げ？」

もぐもぐしながら郡司に問う。

「いや、片栗粉つけてる」

なるほど、それで甘酢だれがよく絡むのか。
さくさくとろ～り。めちゃくちやおいしい。

ごはんにマッチし過ぎて、副菜一品で早くもごはんをおかわりしてしまった。

続いて、ほうれん草のピーナッツ和え。

ピーナッツがたっぷり入っている。こまかくすり潰した分と、粗めに残っているピーナッツが風味と食感を楽しませてくれる。

「わざわざ二回に分けて、すり潰した感じ？」

「……まあ」

面倒くさそうにしながらも、郡司は返事をくれる。

勢いよくごはんを頬張りながら、テーブルの端に置かれた献立のメモをちらりと見る。トマトのふわふわ卵の味噌汁、のところをまじまじと見た。

トマトの味噌汁なんて、初めての体験だ。

味が気になる。

どきどきしながらすると、メモの通り、卵はふんわりしていた。きめ細かい卵の舌触りと、まろやかな味噌の風味。やはり、あつたかい汁物はほつとする。

そして、肝心のトマトと味噌の組み合わせは意外にも合っていた。トマトの酸味と味噌に溶けだした出汁の旨味がおいしくて、ほっこりする。

そして、いよいよメイン。五目巾着煮にそつと箸を伸ばした。

見た目にもふっくらした揚げにかぶりつくと、やさしい出汁の旨味がじゅわじゅわ～っとあふれだした。中には、鶏ミンチ、枝豆、みじん切りされた人参としたいけがたっぷりと詰め込まれている。

彩り豊かな具材がうれしい。やさしい味なのにごはんが欲しくなる。

もりもりと食べながら、意外に彼は細かい仕事が好きなのかなと思った。

具材のタネを作つて、油揚げに詰めて、ことこと煮る。五目巾着煮は手間のかかる料理だ。

そういえば、ピーナッツにもひと手間を加えていた。

顔を上げると、郡司はお皿を洗いにシンクへと立っていた。

じつと見ていると、視線が合う。

「なに？」

「こま～ました料理が好きなのかなと思つて」

「別に」

「じゃあ、なんで今日のメインは五目巾着煮なの？」

口の中に詰め込み過ぎて、もごもごと言ひながら彼に問う。

「いなり寿司が好きって書いてあつたから、油揚げを使った

ダルそうに視線を外しながら、郡司が答えた。

「いなり寿司？」

なんの話だろう、と思いながら自分の記憶をたどる。

「あ、好みの欄！」

そういえば、きつちんすたっぷに登録する際に、アレルギーの有無や好みを伝える箇所があつた。

私はまず、アレルギーは無し、と入力した。そして、そのときまたま食べたかったりなり寿司を好みの欄に入れておいたのだ。

「郡司くん、真面目だね～！」

もぐもぐしながら言うと、特にうれしそうにすることもなく、郡司は頷いた。

顧客の好みに合わせて献立を考えるなんて、すごい。

腕は良いし、西依さんといい、きつちんすたっぷは良いスタッフさんを抱えている。

私はおいしいごはんを堪能しながらそんなことを思つた。

彼を見送つたあと、私は鼻歌まじりに入浴の準備をした。いつもはシャワーでサ

サッと済ませるのだけど、今日は金曜日。休日前の夜……！

夜更かしをしてても問題ないので、久しぶりに湯舟に湯をためた。

ちよつと値段の張るバスボムを湯の中に投入して、贅沢な入浴タイムを満喫する。

「普段、がんばってるんだし。これくらいの贅沢は許されるよね……」

バスボムは、しゅわしゅわと音を立てながらあつという間に小さくなっていく。なんとも良い柑橘の香りが浴室に充満する。目を閉じながら、「はあ～～……」と体中の力を抜いた。

……何事も、考え方次第。

この座右の銘は、なかなか気に入っている。

どんなときでも、前向きになれる気がする。

同時に、「がんばること」も大好きだ。

暑苦しいヤツだと指摘されることもあるけど、「がんばること」で道が開ける」ともある。

ダメだったことも、あるけど……

あれは、一年ほど前のこと。「主任」という肩書がついて間もない頃だった。

午後、いつものように自分のデスクで仕事をしていたら、社長に呼ばれた。

社長室は事務所の奥にある。ノックして部屋に入ると、ソファに座るよう促された。少しだけ緊張しながら、私はソファに腰を下ろした。向かいには、織部社長が座っている。社長は五十代の独身男性で、最近は仕事よりも趣味に精を出している。登山が趣味なのだ。

社員から「最近、社長の顔を見ないな」と声が上がるほど、滅多に出社しない。それでも会社は上手く回っているので、問題はないのだろう。

そんな社長が、めずらしく出社している。
おそらくそれには、社長の隣に座っている人物が関係している、と私は直感した。

織部社長。
おそらくそれには、社長の隣に座っている人物が関係している、と私は直感した。

社長の甥だ。

半年ほど前に中途採用され、入社した。これまで、私は特に彼と関わりがなかった。

配属された部署が違っていたし、業務上で接点があつたわけでもない。

それなのに、なぜ自分が呼ばれたのだろう……？